〝偲ぶ会〟で感激の再会

すでに社宅はなくなったが 元通万地域分会と主婦会

「糞尿(こえ)をかぶったつよ」「私もよ」「私は頭から二へんもかぶったつよ。顔ば伝わって口に入ってくるどが、どがんしょんなかったつよ。あーたげん(白石さん、現在久留米市在住の)おかあさんから、手ぬぐいをもらって頭からかぶり、隠れて帰ったつよ」(そのおかあさんも世になしと聞く)

集まってくる人びとのあいさつは、思い出話しとともに一挙に二十余年の昔を現実にする。

十二月二日、玉名市の旅館『大和荘』で、かつての通万地域分会(荒尾市万田社宅)の〝偲ぶ会〟が催された。

すでに社宅はとり壊され、今は当時の面影もなく埋め立てられ、新しい住宅にかわっている。

その昔、三池炭鉱労働組合三川支部通万地域分会に所属した人びとが、二十余年振りに再会のために集まってきた。懐しい顔、顔である。

宴会の前に記念撮影。なぜか(人員が多かった?)男女別々である。

部屋割りができても、各自の部屋に分散しようとはしない。

それもそのはず〝去るも地獄、残るも地獄〟を合言葉に、総労働対総資本の運命をかけた一九六〇年。安保反対闘争と結んで血肉を削るような三池の首切り反対闘争は、三百十三日にわたり、装甲車を連ねた警官隊二万、十万人の労働者の人海戦を果敢にたたかった仲間たちだから……。

生活を守ることがたたかいを支えると、食糧確保のためにす暇を惜しんだものである。

それぞれ同じように年齢を重ねると「ひとつも変わっとらんたい」「年とっとらん」と、大阪から来た人、広島から来た人。福岡、熊本、近くは大牟田、荒尾とそれぞれの生活の場に散っており、ほとんど二十余年振りの顔である。

たたかいの毎日に体と体を寄せ合い、助け合った仲間が久し振りに出会う姿は、また格別である。

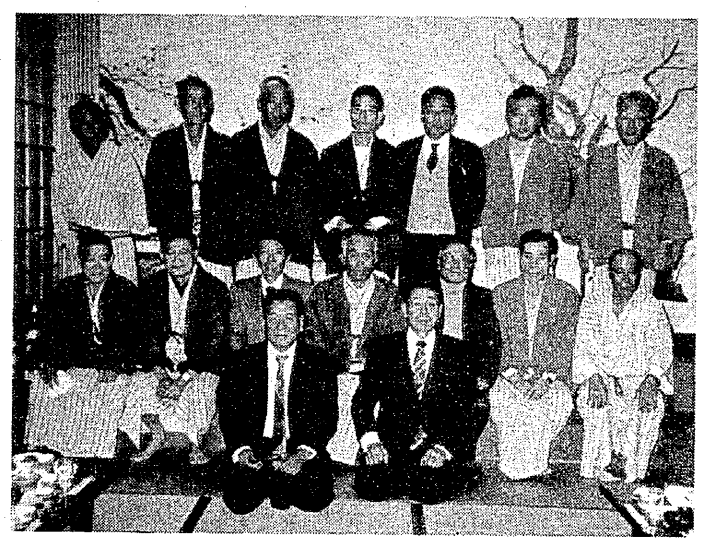
宴会は、歴代地域分会長、主婦会分会長の回顧談ではじまり、時が経つにつれ各自自慢の歌、踊りとなり、羽目をはずすところは大いにはずし、時間の節目はたちまち百八十度の転換。床に入っても容易に寝つかれない。

お互いに離れ難い集まりの余韻は翌日まで続き、誘われるままに同じ玉名市に住まう今村時光さん宅へと、あふれんばかりの大人数が繰り込んだ。

〝偲ぶ会〟の二次会は、『大和荘』の一次会をこえる勢いだったが、足の確保に努力していただいた自家用車の所有者の事情もあり、いつまでもというわけにはいかない。

「もう少し……」という気持を飲み込んで、再会を約しながら二日間にわたる有意義な〝偲ぶ会〟を終えた。

(木村 守・記)



現役はわずかに数人。お互の健康を喜び合ったがすでに故人となった分会員もいた。

三池炭鉱の歴史の中から

あとがきにかえて(一)

その三 第十七回

十五分会 武松輝男

いま、お参り寺とか祈禱所などの、いわゆる新興宗教がたいへん盛んであるという。このようなお参り寺とか祈禱所とかいうのは、政治的、あるいは社会的に世情が不安定になってくると、それこそ雨後の筍のように生まれてくるという。それほど、人間というのは傍目には強そうに見えても心情的にはたいへんな脆さをもっているからであろうと思う。考えてみると私たちがまだ物心つかないときから、祟りとか恨みとか、悪霊とか生霊とか、あるいは怨霊とかにそれこそ包みこまれるようにして生長してきている。

小さいころ、大牟田神社に地獄極楽のありさまを、けばけばしい色調で描いた扁額をかかげていた遠目鏡。坊主山(いまの白金西鉄営業所)に天幕を張った幽霊屋敷などをよく見たものだ。いまはデパートで拡声機から音韻と嬌声をひびかけて幽霊屋敷が催されているが、それを見ながらやはり幽霊屋敷というのは自然の森か、あるいは小高い丘の上で、しかも天幕を張ったものが強烈であるように思える。それはやはり小さいころに受けた強い印象がそのまま五体のどこかに残っているからであるからだろうとも思う。

それにもうひとつ強い印象の残痕があるのは、坊主山の幽霊屋敷のほぼ中ほどにうどん屋があってそこのうどんの汁が赤い色をしていたことである。恨みつらみはうどんの汁の色をも変えるということをいいあらわそうとしたのであろう。そのときは子供同志の肝だめしの心情も手伝って食べたことを憶えているが、いまならとても食べることはできないのではないかと思っている。

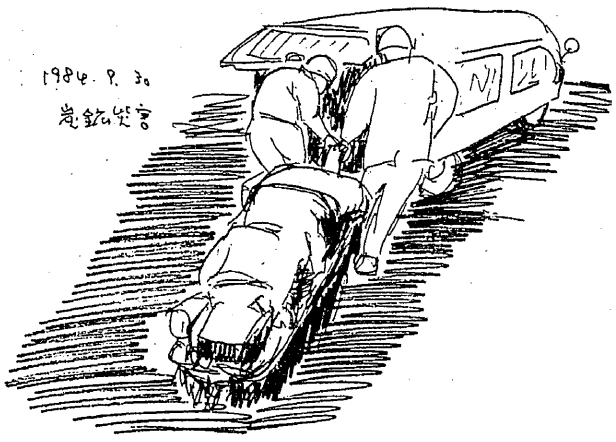
誰だって人から恨みは受けたくはない。また、他の人を恨むこともしたくない。それから死後の世界に地獄と極楽があるかないかは意見の別れるところであるが、できれば地獄へは行きたくはない。地獄というのを見た者は誰もいないが、地獄といえばやはり昔からの地獄絵や遠目鏡が瞼に浮かぶ。あんなひどい目にあいたくないと思う。そのためには日ごろの行いを改め精進することだとも思う。

じつは、日本人の道徳観念はこのような経過をたどって、善いことをすれば極楽へ行くが、悪いことをすれば地獄へ行くという道徳律が生まれてきているのである。

道徳律というとたいへんむずかしく聞えるのでそれを因果応報といい変えてもよい。善悪それぞれの行いに応じて報いがある、ということである。

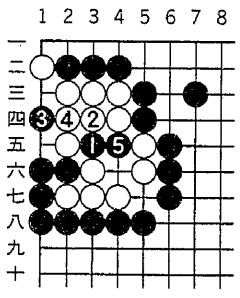
ここまで書けばわかってもらえると思うが、智恩社の教義を、三世の因果とか、輪廻とかいった仏教教典に頼るのではなくて、それを日ごろの生活の中に置きかえていってみたのである。つまり、私たちは日常の生活の繰り返しのなかに、坑夫たちが地獄といって恐れ、間部掘りといって蔑んだ坑内での労働に不平不満をいわないでその境遇をあきらめ、不遇な生活を悟る方法を用いた智恩社の教義を受け入れる素地をもともと持っていたのだといいたかったのである。

(カットも筆者)



詰碁の解答

解答 黒先白死



〈解説〉黒1の切り込みが正解の好手で、白2なら、黒3・5で白死。黒1で1五では、白4で生き。白2で5なら、黒4で白死です。

詰将棋の解答

解答 ▲1二銀成 △同玉 ▲2四桂 △同金 ▲2一角成 △2三玉 ▲1二馬 △3三玉 ▲42飛成まで(九手詰)

〈解説〉初手▲2二桂成は△同玉▲4一角成△5二歩で詰みません。

▲1二銀成から▲2四桂払が正しく、△金に▲2一角成が好手順で、△同玉なら▲2二飛成まで。

婦人の地位向上めざす

婦人部が総会開く

三池労組の婦人部は、第十二回定期総会を十一月二十八日午後五時三十分から『新味よし』で開きました。

経過報告と決算報告のあと、今年度の活動方針と予算案、そして新役員を決めました。

婦人部も十九人と少数になりましたが、あらためて婦人部の役割りを再認識して、三池労組の運動方針にもとづいて各職場の合理化や、さまざまな問題について話し合いを深めることを申し合わせました。

また、三池主婦会や他の単産との連携を強め、交流を通じて学習や実践の中から、婦人としての権利意識を高め、婦人の地位向上のために努力していきます。(この項、婦人部・今村)

新しい役員

部長 今村百合江(本所)
書記長 松島邦子(港務)
組織文体 首藤心子(本所)
会計 上タカ子(三川)
監査 田中芳子(四山)
監査 石田八千代(四山)

勤務の都合で全員集合とまではいかなかったが、この日は忘年会を兼ねて会食しながら語り合った。

ことばなし NEW・YEAR

ごちそう――

年始に訪れた客が帰りがけに礼をいった。

「こんな豪華なお料理をいただいたのは久しぶりです。本当にごちそうさまでした」

その家の子どもが

「僕たちもそうだよ。おばちゃん!」

ビデオ時代――

「初日の出ぐらい見らんといかんな。明日は早く起きるぞ」

子どもが

「それ、どこのチャンネルでやるの。あとで見るからビデオにとっといてよ」